

づんで行つて、いつかその何所であるかも忘れる程に高い調子と高い笑ひ聲をまじへたものとなつた。

さういふ時であつた、私たちは廊下の外からする、

『もし〜!』

といふ高い訛りのある聲に驚かされて、互に顔を見合つた。

それは隣室にゐるウエストンといふ外國宣教師の聲であることがわかつた。その人は、夫人が病氣をして寝てゐるが、我々の話し聲で眠ることができない、遠慮をしてくれ、と要求するのであつた。

成る程、隔ては荒い壁一と重であるから話し聲はよく通ることだらうと察した。迷惑だらうとも心附いた。がまだ宵の口のことだ、それ程までにいはなくともい、だらうといふ氣もした。

『毛唐つてものは——』なんといふ蔭口も出た。が、I君もI君もウエストンには交際を持つてゐた。そして、ウエストンのこの山に對する位置を聞くと、遠慮する

のも當然だといふ氣がした。

山通のI君の話すところによると、日本アルプスを開いたのは、この横濱の宣教師であつた。ここに來て見ると、山の容子が如何にもスイツルで見るアルプスに似てゐるといふので、日本アルプスと命名した。そしてこの絶景を、世界にむかつて紹介した。ウエストンがここに來た時に、この山中にゐたのは一嘉門次があつたのみであつた。彼はこの外人を背に負つて前古末踏の一萬尺前後の山を案内しまはつたのであつた。

爾來この宣教師は年々この山へ來る。夫人も山好きで同行してゐる、今年こゝろは夫人と一緒に常念へ登らうといふ計畫で來たのであるが、舊知の嘉門次の小屋へ招かれて、梓川を徒渉して行つたために、夫人は風を引いてしまつて寝てゐるのだ、といふことを聞いた。

嘉門次は十八の年からこの山中に籠つて、もう六十年を動かすにゐる。生業は岩魚なをとる事で、その道では天才である。粗末な火繩銃一挺でもう熊を六十四匹打つた

日本アルプスのこちらの方面では、彼は「ぬし」だと呼ばれてゐる。その名は日本でも、登山好きの外人の間によく通つてゐて、今では世界的の名になつてゐることであつた。嘉門次の小屋といふのは明神の池の側にあることも聞いた。

そんな話を聞いた揚句であつた。その日も登山をするとしては天氣の見定めが附かないといはれて一日ごろ／＼してゐるより外はなかつた。それに舅は、さうかう遊んでもゐられないから、明日ごろは家へ歸らうといひだしたので、それでは明神の池でも見に行かうといふので、谷君と舅と私とで出懸けた。路の案内はI君からよく聞いてあつた。

鏝廣の麥藁帽子で午後の日光を遮つて、私たちはぶら／＼と梓川に沿つて下つて行つた。河童橋を渡ると私たちは、その橋の袂に据わり込んでゐる六七人の、中學生と見えて制服に雑嚢をかけた連中を見かけた。何か相談をして、それがきまらずにゐるやうなのが一行の顔いろで知れた。ここへ来て山の怖ろしさを初めて知つた私たちは、黙つて見すごすことが出来なくなつた。私たちはその前へ立ち留つた。

『どこへ行くんです君らは？』と私は尋ねた。

一行は地方の中學生によくある、自負と、そして自身を語るに下手なところを持つてゐて、早速には事情が分らなかつた。が、とにかく登山を志して来て、昨夜は馬小屋で野宿同様に明かした。そして、一行のうち或る者は、これからすぐに山に向はうといひ、或る者は温泉へ泊らうといつてゐて、それで相談がきまらずにゐることだけがやう／＼に察しられた。

『そんな無鐵砲なことをすると命懸けですよ。』と私たちはいつた。

『宿へ泊つて、案内を雇つて行きたまへ。それでないと、とても駄目だ。』ともすゝめた。

が、年長と見える青年は、明らかに反抗の色を示した。いらぬ世話だといはなればかりであつた。私たちは通り過ぎるより外はなくなつた。

『あゝ、いふ連中がしくじるんだ。』と私たちは案じながら河原に下りた。

いはれたやうに柳の藪に沿つて淺瀬があつた。向う岸には大木の倒れたのが目じ

るしになつてゐた。私たちは裾をからげてちやぶくと水へはいつた。

水は刺すやうなつめたさであつた。水勢の急なものと、底の小石の圓いのは歩みを思ふやうにさせなかつた。「つめたい！つめたい！」と呟いて渡つてゐた私たちはすぐに黙らせられてしまつた。今は足に感觸がうせて來さうである。もう三四間もあらうものなら、明らかに動けなくなる、と思はれる時に私たちは岸へのぼることが出來た。股から下は眞つ赤になつて、寒さは背にまでも傳つて來てゐた。

柳の林のなかに、おのづから青草が踏みつけられて小路になつてゐた。私たちはそれを踏み踏み進んで行つた。

ふと私たちの前に、どこから來たともわからない二人の人があらはれた、二人とも登山姿をして、そして案内なしで登りうる山やま通らしく、食料を入れたと思はれる背囊やうの物をめい／＼に背負つてゐた。今山から下りて來た所と見えて、顔いろは土けいろをして、眼は疲労の爲に据わつてしまつてゐるが、氣は立つてゐるらしく一種の光を帯びてゐた。人品から見て、中學の教師の若い連中とでもいふやうに

見えた。

若い方は私たちを見かけるとすぐに尋ねた。

『温泉は、あつちの方角に當つてゐませうか？』

『反對です、そんな方へ行くと山へ行つてしまひます。——これを眞つすぐ行くと淺瀬がありますから、それを渡つて下流の方へ附いて行くんです。すぐ見えます。』

二人は黙つて時儀をして、柳の蔭へ見えなくなつて行つた。

『ひどい顔をしてゐたね。』と谷君は心配さうに呟いた。山といふものゝ怖ろしさが私たちの胸を掠めた。

『小屋がある！』は谷君は目ざとく見附けて指ざした。嘉門次の小屋である。山岳に氣の利いた平屋で、まだ眞新しかつた。周囲は樹立と熊笹などで圍まれてゐて、青いなかに埋まつたやうになつてゐた。主人はゐないと見えて、戸はみんな締まつてゐた。私たちはその小屋のなかに胡坐あぐらをかいてゐる七十の老人の姿を想像した。私

には何も浮かばなくてたゞ家の中の暗さうなことだけが思はれた。家と路との間には可なり深さのある流れがあつて橋がかかつてゐた。橋の側が用水場になつてゐて、鐵の鍋が一枚洗ひさして置いてあつた。それが眞つ黒に見えた。

「よつ程變な爺さんだと見えますね。何だんだつてこんな所へはいり込んだもんでせう？」

この深山にたゞ一人で生涯を暮した爺さんの心持が、その家を見ると一層汲み取り難いものになつて來たので、私はいふともなくいつた。舅は事もなげに解釋して聞かせた。

「なあに、何うつて程の事はない、島々邊の川漁好きの者が、川を遡つて來て、岩魚がよく捕れるつてどこから一年一年と住みついてしまつたつてものでせうね。」
成る程さうだらう。爺さんに取つてはここが一番魚のある、得な場所だといふことだらう。夢を持つてなんて、そんな譯ではなかつたらう。何だつて私はまた、そんな空想的な考へ方をしようとするのだらうと自身を思つた。

路は、丹塗りの華表の前へ出た。華表の奥には、石を組み上げた上に小さな祠がまつつてあつた。——荒れた、人げのない所に、かうした人里めいたもののあるのが、却つて不思議な氣をさせた。

祠の裏へ出ると、そこは大きな池になつてゐた。池の向う側は、直ぐに山で、茶色の峻しい岩山は、空からこの池にすべり込まうとするかのやうに見られた。こちら側は、ぐるりと丈の高い熊笹で縁を取られてゐて、熊笹の上には大木が密生して暗い蔭を落としてゐた。池の水は眞つ青に、つめたく光つてゐるが、その上には一すぢの光線もさしてはゐなかつた。

「へえ！」と私たちは感嘆の聲を立てたぎり、いつまでも黙つて身動きもしずそこに立つてゐた。

幽暗な、不思議な場所へ來たといふ感じは、ゐればゐる程深くなつて來た。全くそこは、今までゐた所と同じ地續きだといふ感じを失はせてしまふ場所であつた。

舅は振り返つて、眼で彼方へ行かうと誘つて、熊笹をざわざわと兩手で掻き分け

て進んだ。谷君が續いた。私もあとから附いて行つた。熊笹は身を隠すほど高いので、先へ立つた者の姿はすぐに隠れてしまつて、たゞはくいふ音と、ちら／＼と見える白い浴衣の一部だけになつてしまつた。足の下では、土が踏むに従つてぶくぶくとして、沼地の上に汚ち葉の積もり重なつてゐるのだといふことを思はせた。

私たちはまた水際へ並んだ。そこからは向う側の山は樹立の山と變つて來た。そして池の縁に生え續いてゐる水草のうす青い色の美しさは、私のまだ見たことのない美しさで、見てゐるうちに消えて行くものゝやうに思はれた。私たちの立つてゐる所から、池の水を三四間離れて、一つの中島が浮いてゐた。それは岩の積み重ねでその上には大きな石楠の木がうす紅の花を一杯に咲かせて立つてゐた。その下にはほのかな黄色をした細かい花を附けた藪があつた。鶯が一羽、その石楠の葉かげからしきりに朗かな聲を立て、啼いてゐた。

水の上を眺めてゐた谷君は、

『あの島へ行つて見よう。』といひ出した。

眞つ青く、底を見せない水も、その中島までの間は青さを持つてゐなかつた。底には大きな白い石が續いてゐて、うす青い苔をかぶつてゐた。石傳ひに渡れば渡つて行かれさうに見えた。

私たちは裾をからげて、下駄をさげて渡り出した。冷たさは足へ染みた。池の持つてゐる一種の氣は、足裏でつるつるとして、ともするとすべらうとするその苔の感じのうちにもあつた。

中島はじく／＼としてゐた。そこに立つと池は私たちを取り圍んで來て、眼界を一變させた。

鶯は啼きつゞけてゐた。眼の前の石楠の枝に朗らかに啼きつゞけてゐた。手を伸ばせばつかまへられさうに見えた。その容子を見てゐると、この鶯は人間といふものも、人間といふものが如何に惡意を持つてゐるものであるかも知らないのだと思つた。愛らしい鳥の姿に私たちは見とれずにはゐられなかつた。

ほの黄いろく見えた細かい花は、側へ寄つて見るといた／＼しいまでの清らかさ

を持つてゐた。その清らかさは、すつきりとしながらも、薄色のよわくしさを持つてゐる、その配合から湧いて来るものであつた。

『何て花でせうね?』

『たしか、深山つゝじといふのだらうと思ふが。』と舅はいつた。

しんとして漣も起らない水の上に、すつと何かの影が落ちた。と見ると直ぐに消えた。驚いて眼を見はると、同じ状態が又繰り返された。岩魚だと心附いた。

眼を移すと、私ははつとした。それはここから見ると、あの祠の眞うしろにそば立つてゐた赤色の岩山は、倒しまに池のなかに映つて、深く深く、限りの知れないものになつてゐた。それと知りつゝも深碧の水に沈んだ茶色の山は、空に見あげた時よりも、遙に美しく怪しいものとなつて、見る見る何うにかなつて行きさうに思はれるのであつた。

私はI君の話を思ひ出した。それは明神嶽の上に白い幣のあらはれてゐるのが、池の水の上だけにだけ見えたといひ傳へてゐるといふことであつた。或る時の心で眺め

たならば、この池とこの山とは、幣も生むだらう、神の姿も生むだらう。

涼しさは寒さになつた。私たちは中島から熊笹のなかへ歸つた、柳林へ出ると日光は明るく照つてゐた。明神の池は感激した胸のなかにはつきりと映つて見えてゐた。それを見ながらも私はまだ見てはゐないやうな氣がした。

水際の水草のうす青い一列は、川を渡つても、川原で石を拾つても、宿へ歸つても、また眼に續いて並んでゐた。

浴槽へ行くど。さつきの二人連れは湯に浸つてゐた。

『山は何うでした?』と私は尋ねた。

『はあ……』といつたぎり、その人は何とも云はなかつた。悸えたやうな眼の色を見ると、この人は言葉にすることが出来ないのだと察した。やゝぬるさを感じる湯に浸つて、湯桁に首をもたせると、高い窓から霞澤岳の一角と、そこを越して青くふるへてゐるやうな空の一部とが眼に落ちて來た。

上高地の谿谷にて詠める

附録として、上高地の谿谷で詠んだ
歌を添へることにした。これは歌集
「濁れる川」に一度をさめたもので、且
つ境も同じものであるが、記念とし
て添へておきたい爲である。

島々への途上

さらさらと暗闇の底に起る音水ぞと思ひ手さ
ぐりにけり

くらやみの路に行きあたり驚きて見つむれば
こは黒の大牛

路のべの山田の上に、亂れ飛び螢ひかれどつか
れたりわれ

か黒なる山の山裾ともし火の一つ見ゆるに聲
あげにけり

ほのぐらき湯壺のうちにわがれ入れば人ひとり
居てもものいはずけり

寝なんとぞ獨りごちつゝわがし床にぞ入りぬ
山のはたごや

きやんきやんと死ぬらんやうに犬の鳴き鳴き
やまなくも夜いたく更かけぬ

徳 本 越 え

荷を背負ひ高やま越ゆるにんげんのうしろ
をさみしとぞ見る

惱ましく曇れる空にしみどほり桂の大樹山に
かをるも

汝が二なささわやかさにぞ心澄み山の桂よ離
れゆき難し

すすすくと桂の若枝千枝に立ちか青く立ちて
香を吐けるかも

徳本の峰越えかねて息づけば頭にちかくはた
たがみ鳴る

心細みたたすむ我を高やまの夕立の雨のうち
たたくかな

大木たきに身をすり寄せて隠るへば青の峰たけつつみ
夕立ゆふだちきたる

うづくまりあれば怖れに死にぬべみ雨荒るる
中の徳本とくもとを攀よづ

徳本とくもとの山押しつつみ眞白くも夕立の降れば死
ねよとぞ歩む

おのづから倒れて朽つる大木たきの眞青まきき谷やに白
く晒ひれし見ゆ

夕立ゆふだちのしづくしらじら光りつゝ暗き木下こしたにこ
ぼれをる見ゆ

徳本とくもとの峰たけに年とし経る橡くわの樹きの眞青まきくもその葉光
りたるかな

この谷の榊の大樹とかの谷の榊の大樹と枝さ
しかはす

徳本の峰の笹原ぬけいでて眞白くも立つ白樺
の樹か

久方の天に照る日もまさみしく眼に見ゆるか
な徳本に來れば

徳本の峰によちのぼりふりあふぎ正目に見た
る穂高岳はも

穂高だけ正目に汝れをあふぎ見れば生けらく
神に似てあらずやも

穂高岳ほのに光らせ雨雲の深きをもりて夕日
さしぬれ

上高地の谿谷

梅の樹に梅のかさなり眞暗くも空さへぎれば
鳥の音もせぬ

現身の人の來たるを押し返し木根木立ども住
める境か

木立のみ生くべき國に入りや來し行く行く心
さみしきぞわれ

老木が吐ける息かもひやひやどわが顔打つに
さみしくなりぬ

見はるかす河原の石のしらじらと雪にかも似
て水の流るる(梓川)

岩打ちて碎くると見れば眞青なる梓川水しぶ
きと散るも

おのれこぼす落葉の上に根を張りて立てらく
柵の岩に老ゆるも

白樺の林のうちにあらはれて歩み來る人のな
つかしきかな

放牧の駒ども人のわれら見てなつかしげにも
近寄り來るも(谿谷は直ちに牧場となつてゐる)

ものいはぬ駒にしあれど生きものの汝れをし
見ればわれもただずむ

森に寝て夜の雨にも打たるるや毛並みだれて
駒のあはれなり

何といふ清さぞここにある見れば牛の糞糞それ
もみにくからぬかな

澄みに澄む山の氣ものにしみとほり玉かとぞ
思ふ路の小石も

一つ家の眼に見え来れば越えて来し山はるば
るに思ほゆるかも

何ものもよからざるなき天地天地に來りて立てば
涙くだるも

谿谷の一つ家

うすぐらき湯壺のうちに身をひたし身あぐれ
ば空に青の山見ゆ

夜來るところの山奥の一つ家にランプともせば
 瀬の音高しも

ぬばたまの夜としなれば闇の底にさみしく鳴
 りて梓川きこゆ

みしみしと廊下つたひて来るは誰そ山の氣深
 き夜にもあるかな

夕さればおのづからにも知る人の相集りて灯
 かげまもるも

語らんと相集りし人たちの言葉うばひつ山の
 夜はも

語りやめ三四の人のいちやうに灯かげまもれ
 ばさみし山の夜

山牧の牧まきに集り首寄せて駒もあるかやさみし
き夜かな

うらぶれて山より來にしわか者の眼まなこに怖れも
のはいはずも

岩つばめ雨來くと見ゆる高山たかやまの青に漂ひくるひ
飛ぶかも

雨雲あまぐもの來て狂ほしくあそべるに霞澤岳かすみざはだけうれひ
たるかな

來て遊ぶ天あまのしら雲遊あそびすさみ狂ふとし見れ
ば雨となりぬる

白樺の林

白樺のうすみどり葉のひらひらと山かせ清み
踊りやまずも

白樺の林に來ればわが四方明るくあをくかが
やさわたれ

白樺の林をすきて穂高だけか黒く赤くあらし
襜ぢんみゆ

白樺の林のしたの眞砂まき清み踏みゆく足のかそ
けくも鳴る

この谷にうたひ出しつ鶯のわれとその音ねにお
どろくものか

鶯よさはな啼きそね清らなる白樺の林いのち
取るべし

上高地かみかちきよき極まり立つらくも白樺の木立瘦
せにたらずや

穂高だけ峰に残れるいささかの雪の光りて空
は眞青し

ものすべて荒き谷かも上高地かみかちものすべての
清らなるかも

田代沼

白樺の太き木代りてわたしたる橋をわたりて
梓川越ゆ

獸けものかどわが身思ほゆ日に照りて林も空も眞青
きを行き

踏みて行く笹原の笹さやさやと裾に鳴りつゝ
空の眞青き

森すきて日のさし來れば田代沼まさきを水の
つと光りつゝも

水底の水草ゆらげば濃青にも田代の沼はゆれ
にけるかも

手をひてて見ずはあらぬ清らかさ田代の沼
は玉とすみ通る

田代沼水にうかみて消ゆかにも白くこまかく
咲きてある花

田代沼あまりに汝れが清かるにまたは見難く
思はゆるかも

明神の池

梓川かちわたりゆけば夏の日は空に照りなが
らわが足こごゆ

あまりにも清かるからに明神の池を眼に見て
おちけたるかな

明神の池のみぎはの水草のかあをき草にたま
しひ消ゆる

明神の池の中島その島の石楠しやくなんの枝にうぐひす
啼くも

手をやらば捕へつべきを啼きつづけ山のうぐ
ひす逃げんどもせぬ

明神の池の中島ほのぼのと黄ににほひては深
山つつじ咲く

現身の人のをるべき境ならじあやしくもわが
心消えぬる

現身の人の嘉門次この山に住む家みれば人の
身さみし(嘉門次は數十年この山中に獨り住んでゐる翁である)

この池の岩魚とりてはくらすてふ嘉門次の爺
や神さびぬらし

ふりかへり見ればまだ見ぬものに見え明神の
池はわが心とる

よき石のあらん心地し梓がは廣き河原に低徊
りつも

故郷を経て歸京

親しみてもものいひをるにあはれともなりける
人と別るべきか今

いわけなきわが子の姿さみしかも手引きて旅
に出で立ち來れば(故郷にゐた子を連れ歸る)

笑みつつも我見むかふる妻の眼の親しきかな
や旅より歸り

笑みかへし妻見るわれの眼をとらへ東京の町
をどりかがやく

青山あやまに親しみたりし眼めにうつり東京の町狂ふ
がに見ゆ

口にあふ今宵の食事いささかのこの事だにも
よしやわが家は

山にありて朝の眼ざめに眺めけるうす青き空
なほし眼に見ゆ

旅びとの我いたはりし人たちのなつかしきか
な文書きてまし

故郷より日本アルプスを望みて

槍が岳汝が萬尺のいただきもさみし掌の上の
雪かどぞ見え

常念じやうねんのかの高山たかやまはいづれぞと眼めもてさがしぬ
群山ぐんざんのうち

蝶が岳ましろくも見ゆむらさきに端山繁山か
さなるあなた

大正五年七月七日印刷
大正五年七月十日發行

〔定價金八十五錢〕

版權所有

著者 窪田通治

發行者 中村一六

東京市牛込區神樂町二丁目廿二番地

印刷者 杉本新吉

東京市神田區小川町二丁目六番地

印刷所 大精社

東京市神田區小川町二丁目六番地

東京市牛込區神樂町二丁目廿二番地

發行所

天弦堂書房

振替口座東京二九五五九番

思想の源 近代思想叢書

新型美本二百五十頁
定價 五十六錢
送料 六錢

(但し十一篇十二篇に限り六十五錢)

大正年間初頭に澎湃として來りし思想界に於て先驅者たりしものは是の叢書也

第一 超人の哲學 生田長江	第七 ロマン・ロオランの思想と藝術 内藤 濯
第二 惡魔主義の思想と文藝 岩野泡鳴	第八 ゴッティと現代思潮 稻毛詛風
第三 個人主義思潮 相馬御風	第九 トリス人道主義 加藤一夫
第四 未來派及立體派の藝術 木村莊八	第十 神秘主義の思想と生活 吉江孤雁
第五 印象主義の思想と藝術 高村光太郎	第十一 ハウエルンの哲學 大住嘯風
第六 聖者の生活 吉田絃二郎	第十二 虛無思想の研究 生田春月

會員募集

全部完結

會員

には新形セ、シヨニ式書架進呈

詳細

往復書又は郵券封入にて

申込次第規約書進呈

ドストエフスキー著 廣津和朗譯
貧しき人々

定價 一圓
送料 八錢

カアペンタア著 富田碎花譯
民主主義の方へ

總紺色洋布天金美本
定價 一圓二十錢
送料 八錢

ユナンドイル著 加藤朝鳥譯
シヤロツクホルムス

全譯 全三冊
定價 各七十錢
送料 各六錢

澤田順次郎 ドクトル 羽太鉛治著
近最 犯罪の研究

定價 一圓三十錢
送料 八錢

藝術座演劇學校講師 西本朝春著
美貌と表情

定價 三十五錢
送料 四錢

窪田 紀行文 日本アルプスへ

送料 八 十 銭

與謝野晶子女史著

感想及 隨筆集 人及び女ごして

送料 八 十 銭

稻毛 詔 屈 著

感想及 隨筆集 愛し得ざる悲哀

送料 八 十 銭

近刊書籍

(各目下印刷中)

大住嘯風著 自由思想史

吉井勇著 我が戀歌

武者小路實篤著 感想集 小 さ き 泉

與謝野晶子著 感想集 砂 の 塔

大住嘯風著

自由思想史

總クローヌ箱入特製頗美本
定價一圓二十錢 送料八錢

本書は現日本思想界の巨星大住氏が著書に披瀝して遠くギリシヤの古代より近代に渉れるあらゆる自由思想家、大哲學者、大宗教家等苟しくも永遠の自由と精神的解放を求めて苦慘なる争闘を續けたる巨人の跡を辿り系統を追ふて最も適切切なる説明を施せるものにて本邦未曾有の系統的哲學研究書と唱ふべく唯一至高の哲學史とも見るを得べく敢て系統的哲學の智識と基本的思想の根柢を究むるの士に薦む。

内容

▲自由には何ぞや ▲權威と自由 ▲自由思想の意義 ▲自由思想の消長 ▲古代文明と思想 ▲哲學と自由思想 ▲ソクラテス以前の自由思想と自由思想派 ▲ソクラテス ▲プラトーン ▲アリストートル ▲快樂派とストアック派 ▲基督教と其の教理 ▲基督教と自由思想 ▲羅馬教會と宗教改革 ▲ルートルと其の同代人 ▲反抗派 ▲プロテスタント ▲サボナロー ▲ミルトンとロツク ▲ゾラ ▲ルテール ▲ミルソウ ▲近代自由思想家 ▲スピノザとロツク ▲理性と權威 ▲ゲーテとシルラー ▲十九世紀の合理論 ▲近代主義 ▲人道派とモニズム

一斑

與謝野晶子女史著 橋口五葉氏裝畫

詩歌集 舞 ころも

表紙鳥の子木版數度刷
箱彩色華麗
定價壹圓 送料八錢

曾つて「みだれ髪」「戀衣」「舞姫」等の諸巻に於て絢爛、奔放一代の人目を眩せしめし女史が歌は爾來その細密なる自己省察の努力と深き生活の沈潜の奥底とより漸くにして精選なる理智と驚く可き技巧の圓熟を加え來れり、而してこれ詩人としての女史が這般の傾向と特殊の色彩の最もよく顯現せる最近の詩及歌數百篇を收めたるもの蓋し 正詩歌壇に於ける女史が偉業を知るものは本集が現代及 代に對し如何に重大なる意義と價值とを更に齎すべきかを窺知するならん。敢て以て江湖に薦む。

若山牧水著

歌朝の歌 定價六十五錢
送料六錢

ふるさとの秋の最中をふと思ふおはね空の
有明の月

吉井勇著

近刊 歌集 明眸行 定價六十五錢
送料六錢

これ水莊記以後の叙情散文集なり美しき戀の
歌物語なり

360
441

終